

明治学院歴史資料館

News Letter

No.15

2023

目次：

- 1 卷頭言 『井深梶之助日記』の翻刻と刊行に寄せて
/ 戸谷浩 (歴史資料館館長、国際学部国際学科教授)
- 2-3 明治学院礼拝堂の石材
/ 橋本優子 (近代建築・デザイン史家)
- 4-5 企画展「井深梶之助 つながる、ひろがる」より
—my own Hana の和歌— / 松本智子 (特任研究員)
- 6-7 紙面にみる明治学院大学第二部学生新聞会の軌跡
/ 細井守 (特任研究員)
- 8 明治学院歴史資料館 2023 年度主な活動、その他

卷頭言

『井深梶之助日記』の翻刻と刊行に寄せて

戸谷 浩 (歴史資料館館長、国際学部国際学科教授)

現在、歴史資料館では、キリスト教研究所との協働プロジェクトとして、明治学院の第2代総理であった井深梶之助の日記の翻刻と刊行作業を進めています。明治期の作業が一段落つき、今は大正期の作業に歩を進めております。さらに昭和期が控えているので、貴重ではあるものの、息の長い作業が続きます。

歴史学を専門とする立場から言うと、「日記」は議論が分かれがちな、やや複雑な境界線の上に立つ歴史史料であるように思われます。例えば、「日記」上の記載が正確なのか、そうでないのかは、歴史家の頭を大いに悩ませます。「本人が書いているのだから正しいだろう」とも言えますが、その一方で「当事者だからこそその思い込み」から本当に逃れられているのかは、別の史料などと突き合わせて初めて確かめることができるものとも言えましょう。

そもそも「日記」が私的な秘匿物であるのか、あるいは、将来、誰かに読まれることを前提に書かれたものなのかの判断も難しい問題であるように思われます。市井の無名の個人であっても、家族などの他人の眼を意識して書かれた可能性はゼロではないと思われますし、ましてや井深梶之助のような公的存在や著名人の場合であれば、事態は推して知るべしではないでしょうか。

「日記」が境界線上の存在であるという事実は、他にも、叙述のスタイルが単に一日の行動や各種の数字・事項を記録しておくためだけのものなのか、それとも、やや文学的・内省的に自己や社会の動向を

振り返ろうとしたものなのかの区別も、案外、重要であるのかもしれません。

まだまだ他にも「日記」の境界的な特性を挙げることは可能かもしれません。ただ、そういった揺れる存在に他ならない「日記」も、ある確かなことを私たちに指し示してくれるようと思われます。それは、「日記」を書くという、一定の長い時間と労力を必要とする行為を継続した「日記」の著者自身が、何に関心を持ち、何に拘っていたのかを、仮に無意識であっても、後世の私たちに雄弁に伝えてくれているということです。卑近な例で言えば、その人の「日記」に、毎日の天気が細かく記載され続けているのであれば、少なくともその人にとって晴れなのか雨なのかは、「どうでもよい」といった事象ではなかったことだけは確かであろうと推測できます。

「日記」に限らず、歴史家にとって史料を読むこと、資料に向き合うことは、一種の「過去との対話」を行なうことに他なりません。「日記」の著者が故人であれば、対話は「日記」を通しての「過去との対話」しか方策はないのかもしれません。そこでは読むという行為が、そのまま尋ねるという行為となるでしょう。

「日記」の著者を始めとした過去の世界の人々との豊潤な対話を、「日記」を読むという行為は私たちに届けてくれるのであります。

個人的にはそうしたことも願いつつ、刊行される『井深梶之助日記』のページを開けたらと思っています。

明治学院礼拝堂の石材

橋本 優子（近代建築・デザイン史家）

去る2023年11月4日（土）、縁あって「2023年度明治学院歴史資料館講演会」に登壇の機会をいただいた。

「概念としての石から読み解く」と題したこの講演では、幕末から昭和戦前に展開したキリスト教の建造物を素材・工法の視点でひととき、日本近代の教会、ミッション・スクールの建築において「石はどのような意味を持っていたのか」を掘り下げている。

そして、明治学院白金キャンパスに現存するインブリー館（竣工1889年頃、設計者不詳。木造）、記念館（竣工1890年、設計＝ヘンリー・モア・ランディス宣教師（推定）。煉瓦造・一部木造）、チャペルの見学を通じて、講演内容の実証的な解説を行った。

これに先立ち筆者は、チャペルに使われている石材の調査を行い、興味深い事実が判明したので、その報告を記したい。

明治学院礼拝堂（チャペル）は、アメリカに生まれ、日本に没したミッション建築家ウィリアム・メレル・ヴォーリズ（William Merrell Vories：1880～1964年）の設計により、工事は田林虎之助が請け負った。定礎は1915年（大正4）で、竣工・献堂が一年後（1916年）、以降、1924年（大正13）に関東大震災の復旧、1931-34年（昭和6-9）は大がかりな増改築を経験している。その後も改修が重ねられ、2006-08年（平成18-20）の文化財保存修理を経て現在に至る。1989年（平成元）には港区指定有形文化財となった。

以上の歩みを反映する構造・工法は、煉瓦造・一部鉄筋コンクリート造、一部石積（張）・モルタル仕上、平屋建・一部二階建（ギャラリー）・塔屋付である。様式的にはカレジエイト・ゴシックに位置づけられる。

新築時の平面は、南北に長い丁字形を呈し、建物の南端中央に半八角形の講壇、その東西に小部屋を配する。講壇は、東のオルガン空間（東小部屋手前）、西の椅子席（西小部屋手前）に囲まれ、中央・左右の会衆席と向き合う。この身廊部と明確に分節されるのが北端の玄関間で、東西に細長く、身廊部の幅よりも突出し、それぞれの側に入口が設けられた。玄関とポーチは東で、今日も変わらない。このほか、やはり身廊部から突き出た西小部屋も西に入口を有する。

昭和戦前の増改築では、かつてのオルガン空間、椅子席と、左右の会衆席の講壇寄り約三分の一の範囲に翼廊部が付加される。うち西翼廊は、東翼廊の二倍以上の広さ、

南西角に入口を持ち、当初は仮教室を兼ねていた。こうしてプロテスタントのミッション・スクールらしい大会堂に生まれ変わり、平面はラテン十字形に近づいている。新築時は講壇の真上にあった塔屋も、増改築で身廊部と翼廊部が交差する位置に移された。

本礼拝堂では新築時から身廊部の基壇、外壁の腰見切り、控え壁の下部と水切り、玄関ポーチや他の入口周りに石が用いられた。屋内は煉瓦と同様、漆喰や木の内装材に覆われ、石が露出しているのは昔も今も外観のみである。言い換えると、この建物における石は構造材、外装意匠材の一部に限られる。震災復旧、昭和戦前の増改築でも新築時の意匠が受け継がれたので、翼廊部に見る通り石の使い方は部分的だが、煉瓦との対比が眼を引く。

ほとんどの石は、明色の石材Ⓐと暗色の石材Ⓑに二分される。どちらも1903-09年（明治36-42）の間、チャペルとして機能し、のち解体されたミラー記念礼拝堂（設計＝リヒャルト・ゼール）の材の再利用にほかならない。このことも震災復旧、昭和戦前の増改築で踏襲され、材の確保が困難だった前者はともかく、それが解消された後者の工事でも二種類の旧材を活かしつつ、石材Ⓐと同じものを追加した点が注目に値する。意匠的な統一のみならず、学院の歴史にとってこれらの石が重要な意味を持っていたと考えられるからだ。

石材ⒶⒷが何であるかについて、平成の保存修理に際して編纂された『東京都港区指定有形文化財 明治学院礼拝堂 保存修理工事報告書』には名称や産地に関する記述がない。そこで筆者は、建物に取り付けられた材、経年で剥離したその断片の目視と触察、携帯実体顕微鏡による検分を二回にわたって行った。後日、剥落片の地質学的な同定を産業技術総合研究所 地質調査総合センターに依頼し、一粒社ヴォーリズ建築事務所にも本礼拝堂の石材に関する詳細や、ヴォーリズの石に対する好み、こだわりなどを問い合わせている。

前述の『報告書』に記される石工事関連の保存修理、すなわち劣化部分の除去・清掃、素地面への強化剤塗布、基壇の全面清掃、H1,000mm以上の範囲への撥水処理剤塗布を勘案しながら実施した目視・触察・検分結果は次の通りである。

石材Ⓐは、黄味を帯びた明るい灰色の地に黒い粒子が多数、不規則に並び、小さな孔も見られる。建物の部位、材の仕上によって状態が異なり、こぶ出し仕上には表面の

劣化、層状の浮き上がり、礼拝堂周囲にその剥落片が散見された。身廊北・西側面、西翼廊西側面の日当たりの悪い部位では苔、黴の発生も認められた。劣化していない箇所、割肌仕上を含めて爪の先で剥がれ、ざらざらとした質感を呈する。

これに対して石材⑧は、暗い灰色の地に白い微細な粒子が多数、不規則に並ぶ。こぶ出し仕上には表面の劣化、層状の浮き上がりが若干見られるが、剥落片は少なく、苔、黴の発生も皆無に等しい。石材④より硬質で肌理が細かく、劣化した箇所であっても爪の先で剥離しない。

以上に鑑みて二種類の石材は、岩石としては火成岩のなかの火山岩に分類される安山岩（火成岩>火山岩>安山岩）の可能性が高いと判断した。身廊北側面に嵌め込まれた花崗岩（火成岩>深成岩>花崗岩）の定礎石（1915年）とは見るからに異なる。



チャペル外壁の白丁場石（左）と本小松石（右）

産総研の見解は、石材④が岩石名「輝石デイサイト」（火成岩>火山岩>デイサイト>輝石デイサイト）の石材「白丁場石」（しろちょうばいし：神奈川県足柄下郡湯河原町産）、石材⑧は「輝石安山岩」（火成岩>火山岩>安山岩>輝石安山岩）の「本小松石」（ほんこまついし：同・真鶴町産）ではないか、とのことだった。

白石（しろいし）、相州御影（そうしゅううみかげ）とも呼ばれる白丁場石は、近世から1960年（昭和35）頃まで採掘され、横浜正金銀行本店（現・神奈川県立歴史博物館。竣工1904年、設計=妻木頼黄）を始め、関東圏における日本近代の歴史建築の外装材に多用された。

「〇〇御影」で名を馳せた各地の白い花崗岩石材に風貌が似ており、かつ御影よりも安価、軟質で加工が容易だからである。

一方の本小松石は、少なくとも平安末期に採掘が始まり、今なお産する硬質な銘石として全国に知られ、江戸城（現・皇居）の天下普請（1603年以降）では石垣に使われた。明治学院礼拝堂と同時代の教会建築、日本メソヂスト教会 安藤記念教会会堂（現・日本基督教団 安藤記念教会会堂。献堂1917年、設計=吉武長一）においては、水切りなど構造・意匠上の要所に見ることができる。

このような白い石と黒い石をなぜ、明治・大正・昭和戦前の学院関係者、ヴォーリズが採用したのか。それは言うまでもなく、草創期の学院で教鞭を執り、礼拝堂建設のために住居と敷地を提供したエドワード・ローゼイ・ミラー宣教師（Edward Rothesay Miller：1843-1915年）と、同師の名を冠するミラー記念礼拝堂の顕彰、石材を調達する手間、費用に鑑みてだった。

ミラー記念礼拝堂の建造自体においても、入手しやすく、使い勝手の良い石材が選択されたに違いない。ここで留意せねばならないのは、幕末に欧米から石の組積造がもたらされて以来、日本の風土と技術に合致する石づかい、具体的には洋風の木骨石造、木造石張の模索を経て、煉瓦産業の発展により、煉瓦造石張が主流となつていった明治の情況である。

そのことに大いに寄与したのが教会、ミッション・スクールの建築で、とりわけローマ・カトリック教会の聖堂、聖公会の礼拝堂、プロテスタントの会堂においては、教派の違いを越えて、西洋の伝統と近代、キリスト教、永続性を象徴する「石」がさまざまなかたちで用いられた。明治学院礼拝堂もこれを踏まえている。

〔参考文献〕

- 臨時議院建築局 編（1921）『本邦産建築石材』 東京：重松養二
小山一郎（1931）『日本産石材精義』 東京：龍吟社
日本石材振興会 編（1956）『日本石材史』 東京：日本石材振興会
明治学院 編（2008）『東京都港区指定有形文化財 明治学院礼拝堂保存修理工事報告書』 東京：明治学院
山下浩之、笠間友博（2015）「神奈川県湯河原町に産する通称“白丁場石”の岩石学的特徴」『神奈川県立博物館研究報告（自然科学）』44
高田祐一 編、日本遺跡学会 監修（2019）『産業発展と石切場：全国の採石以降を文化資産へ』 東京：戎光祥出版
宇都宮美術館 編（2023）『二つの教会をめぐる石の物語』 宇都宮：
下野新聞社

本稿は2023年11月4日（土）に明治学院記念館で開催された「『概念としての石』から読み解く：明治学院を中心とする日本近代の教会・学校建築」にて講師を務めた橋本優子氏に執筆いただきました。

橋本優子（はしもと ゆうこ）

京都工芸纖維大学大学院修了。宇都宮美術館学芸員、主任学芸員、専門学芸員を経て近代建築・デザイン史家。文星芸術大学非常勤講師、修士（工学）、宇都宮大学博士後期課程（感性工学）。

著作に、単著『フィンランド・デザインの原点』（2017年、東京美術）、共著『二つの教会をめぐる石の物語』（2023年、下野新聞社）など。

企画展「井深梶之助 つながる、ひろがる」より

— my own Hana の和歌 —

松本 智子（特任研究員）

明治学院歴史資料館では、2023年度企画展として「生誕170年・『井深梶之助日記』刊行記念展示 井深梶之助 つながる、ひろがる」（第1期：2024年1月15日～3月15日、第2期：3月21日～6月21日）を開催した。



明治学院第二代総理・井深梶之助（1854–1940）が残した日記と御子孫からご寄贈いただいた遺品の数々を中心紹介しながら、明治学院を30年にわたり牽引してきた井深への理解を深めていただくとともに、より身近に感じ親しんでいただくことを目的としたものである。

また、日記の内容と所蔵資料がつながる、更にその資料と周辺の資料とがつながってゆき、それぞれの資料の持つ背景が少しずつ広がってゆく、その面白さを多くのみなさまと共有したいという思いで展示を構成した。



企画展「井深梶之助 つながる、ひろがる」会場風景

日記、遺品という資料の性質上、公的な井深というよりも、これまであまり取り上げられなかった私的な側面に焦点をあてることになった。結果として、井深の人物像を多角的に捉える良い機会になったのではないだろうか。

井深を知る卒業生たちは、井深について「怖い先生」、「威厳のある学者らしい中年の紳士」「古武士的風格の豊かな方」などと語っている^(注1)が、井深はこれらのイメージとは異なる意外な一面を併せ持つ。展示解説では書き切れなかった内容を加えつつ、ここに紹介したい。

1930（昭和5）年7月6日、富士見町教会の有志者によって井深の喜寿（77歳）を祝う会が催された。井深は夫人の花子（戸籍上は花）を伴い会に出向いている^(注2)。この会に参加した英語教育者の磯辺弥一郎（1861–1931）は、雑誌『英語青年』^(注3)に、祝宴の報告も兼ね、「神学博士井深梶之助氏」と題した一文を寄せた。その中に「英語交りの和歌」という小見出しで、井深が夫人の花子を褒めたたえて詠んだ次の和歌を紹介している。

花といふ花はあれども my own
花にまさる 花ぞ世になき

「花という名を持つ花はたくさんあるけれども、my own (=私自身)の妻である花子にまさる花はこの世にはない(私の花が一番である)」という意。磯辺の文章は「井深氏は若い時には昔のサムライを偲ばせる謂はゆる威あって猛からざる仲々の美丈夫であつたが…」と続く。磯辺が耳にした右の和歌を紹介したのは、従来の井深のイメージとはあまりにかけ離れていたからであろう。胸の中におさめておくことができなかつたようである。しかし、おさめておけなかつたのは磯辺だけではなかつた。

日本Y M C A同盟総主事を務めた齊藤惣一（1886–1960）も井深の和歌に関する別のエピソードを書き残している^(注4)。

先生がある日こんな歌ができましたよと示されたのは、

世の中に花てふ花は多くあれど
わが花にまさる花ぞ世になき

先生の夫人は花子という学者で、流暢な英語を話され

る賢夫人だったので、これを厳格そのものといつていい先生の口から伺う時、ほほえまざるを得なかつた。

ここに見える「世の中に」の和歌も、磯辺が掲げたものと少し表現は異なるものの歌意は同じ、まさに、ほほえましい一首である。

井深には勢喜子という先妻がいた。勢喜子も井深にとってかけがえのない存在であったが、病気のため38歳という若さで生涯をとじた。その後、井深は、神戸女学院で理化学部の教師をしていた10歳年下の大島花子と再婚する。

花子は、1865（元治2）年、現在の岡山県に生まれ、神戸英和女学校（のちの神戸女学院）を卒業後、鳥取英和女学校の教頭兼教師を務めた。1891（明治24）年に渡米し、Mount Holyoke Collegeに入学。Scientific Courseを専攻し、1895（明治28）年6月に修了。Bachelor of Scienceの学位を取得。当時、日本から留学した女学生の多くは文学や教育学を専攻することが多く、花子のように理系科目を専攻する者は異例であったといふ^(注5)。



Mount Holyoke College
卒業時の花子（1895年）

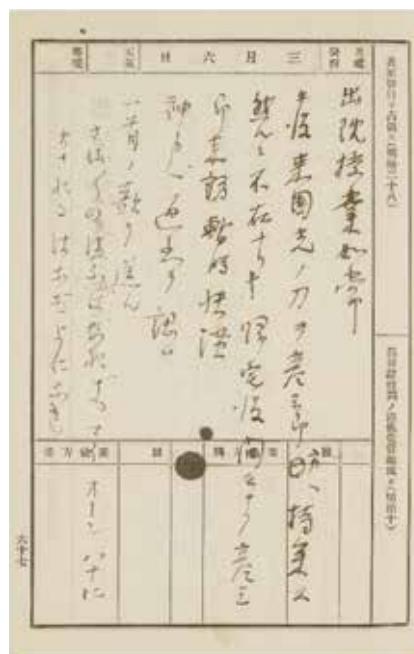
帰国後は、母校神戸女学院の教師となる。花子もまた、井深に劣らず英語が堪能で、外国人宣教師の礼拝において通訳を務めることもあった^(注6)。井深と結婚した後も東京女子学院、東洋英和女学校等で教鞭をとり、その傍ら神戸女学院、東京女子大学、日本基督教婦人矯風会の理事、日本YWCA初代委員長などを歴任。

花子は1917（大正6）年の『婦人之友』^(注7)に次のように書いている。

出来るだけ仕事の手廻しをよくして時を作り、夫に対しては本当に良い妻であり、子供のために大切な母であって、なほその上社会のために何か尽くして、神様の御用もつとめたいと思ふ

花子は、生活の中心を家庭にすえつつ、教師をつとめ、女性の地位向上と教育の男女平等を求めて尽力した。何事にも手際がよく、春の末には秋の支度が、夏の終わりには次の年の夏の用意が出来ているような女性であった^(注8)。

このたび、明治学院歴史資料館と明治学院大学キリスト教研研究所の協働により『井深梶之助日記 明治編』^(注9)が刊行されたが、その中に、花子を褒めたたえる和歌の原型を見ることができる。二人が結婚する10カ月ほど前に書かれた井深の日記、1899（明治32）年3月6日条には「神戸へ返書ヲ認（したた）ム、一首ノ歌ヲ送ル」として、「さまざまのはなはあれどもマイオーンハナにまされるはなぞよになき」と記され、また、線で消されてはいるが、翌日条には「マイオーンハナ」を「my own Hana」とする同じ歌が見える。花子への贈歌の控えとして書き記されたものであろう。二人は翌年の1月に結婚。



『井深梶之助日記』1899年3月6日条、贈歌は最後の2行

花子を褒めたたえる和歌は、結婚前に井深が花子へ贈ったものであったが、斎藤たちが語るように、晩年にも同様の和歌を折に触れ周囲に披露していたのである。

威厳ある姿はもとより、このようにチャーミングな井深梶之助に惹きつけられた人々も多かったにちがいない。

- (注1) 『明治学院歴史資料館資料集』第1集「井深梶之助の思い出」に拠る。
- (注2) 『井深梶之助日記』昭和5年7月6日条。
- (注3) 『英語青年』63卷12号、1930年9月。
- (注4) 海老名義道『斎藤惣一とYMCA』日本YMCA同盟出版部、1965年、297頁。
- (注5) 『井深梶之助とその時代』第2巻、450頁。
- (注6) 『めぐみ』19号、神戸女学院同窓会、1899年、4頁。
- (注7) 『婦人之友』11卷8号、1917年8月、井深花子「次の時まで延ばさない主義」。
- (注8) 同上。
- (注9) 明治学院歴史資料館・明治学院大学キリスト教研研究所編、学校法人明治学院、2024年。

紙面にみる明治学院大学第二部学生新聞会の軌跡

細井 守（特任研究員）

■明治学院大学学生新聞の濫觴

1886年（明治19年）に東京一致神学校、東京一致英和学校及び英和予備校が合併して成立した明治学院は、1903年に神学部と高等学部が専門学校令によつて認可された。高等学部は1928年（昭和3年）に高等商業部、高等学部（社会科、英文科）に改組され、さらに1935年には高等商学部に第一部（昼間）、第二部（夜間）が開設された。そして、高等商業部では1938年から、「教授団、高商部同窓会、学友会、第二部学友会及び保證人会の五団体より組織せられてゐる高商時報会に依て（中略）刊行せられ（石橋近三「改題『明治学院時報』発行に際して」『明治学院時報』74号）ていた『明治学院高商時報』の第8号を改題『明治学院時報』74号として、第二部を含めた学院の広報誌として発刊する運びとなつた（同前）。この『時報』は第128号（1943年9月20日発行）まで確認できる。

■戦後の動向～第二部学生新聞の発刊

戦後は、1946年（昭和21年）（12月5日創刊）から明治学院新聞部の編集による『明治学院新聞』が創刊された。この発刊に際して、当時の学院長矢野貫城は同紙に「新聞復活のことば」と題して次のようにコメントを寄せている。

明治学院時報として親しまれた学院新聞が一九四三年百三十余号を最後として時の圧力により廃刊を余儀なくされて以来、学園と家庭、先輩と後輩、先生と生徒とを繋いでゐた唯一つの動脈がたたれで既に三年、しかもその間お互日本人は一世紀以上の変化を経験した。何もかも御破算にして新たに出直さうとしてゐる。日本が、学院が、お互が、この時に當り北から南から続々復員して来る卒業生が昭和十八年の最後の時報まで、あるひは大陸の塹壕の中に、あるひは南洋の孤島において「時報」によつて懐しい白金の母校のほひを嗅いだといふ事を聞かされて、今更の如くこの声なき小さき使者の偉大な足跡に驚きの目を見張ると共に何はさて措き学院の復興は先づ第一に時報を復活して血を通はせ

なければと願つてみたが、この度幸にも坂庭吉雄、渡辺新一郎、中春雄等の諸先輩、杉本幹事、高谷教授、関根斎藤両教諭、専門部、中等部の新聞部員の努力により「明治学院新聞」として再刊の運びとなつことは喜ばしい限りである。」

一方、『明治学院新聞』20号（1949年2月15日発行）には、次のような記事が見える。

〔タイトル〕第二学部を目指す人々の為に

（明治学院の第二部は）学院創立の精神に則り、基督教による人格教育を根本義として、昭和十年四月高等商業部第二部として設置されたのがその濫觴であり、同十九年、青山学院夜間部を統合し、明治学院専門学校経済科第二部となり、二十一年に至つて更らに商経科と改称し、英米文学の研究を望む人々に英語科を併置しかく雄飛的躍進を続け、十有四年真摯なる人材を幾多世に送ってきたのであつた。今回の学制改革により両科は専門学校として、その光栄ある過去に終止符を打ち、新制大学の設立と共に文経学部第二学部として昼間部と何ら異なるところなき内容をもって、新らしき歴史の第一頁を飾る事になったのである。（大学教務課諸橋）

第一部の学生新聞が戦前の『時報』を引き継ぐ形で『明治学院新聞』として刊行されたのに対し、第二部の学生新聞は少し遅れて、『明治学院大学第二部学生新聞』として発刊された。（創刊号は不明。現存は1955年2月24日発行の第7号から。途中よりタイトルを「明治学院大学学生新聞」、さらに「明治学院新聞」、「明治学院大学新聞」等と変更）。

■第二部学生新聞の終刊

1970年（昭和45年）になると『明治学院大学新聞（II部新聞会）』は『明学新聞』に名称変更する。「1977年、II部新聞会編集局は、当局よりの根拠不明ないいくつかの理由によって廃部通告を受けた」、その後、「学生の協力・援助によって数度の発行をなし、昭和53年130号より、第II部学生自治会新聞会という名称を明学大II部新聞会と変更した」（『明学

新聞』第1号「今後の編集局の基本的方向」)。

そして、1979年に改めて『明学新聞』編集局を発足し、同年12月5日付で『明学新聞』第1号を発行している(同紙第2号の発行は1982年6月21日)。

学生新聞への廃刊要請は、多分に、当時熾烈を極めた「学内闘争」が影響しているのであろう。『明学新聞』は第2号以降の発行は不明で、その終刊についても確認できない。

なお、同大学第一部では、明治学院大学学生新聞会(1959年4月15日発足)が『明治学院学生新聞』を引き継ぎ、第124号から『明治学院大学新聞』に改称した(現存は297号(1976年7月23日発行)まで)。

学内では、『大学新聞』とは別に『明治学院大学報しろかね』(1966年3月5日創刊)が発刊されて、「学生新聞の時代」は終わりを告げることになる。

『明治学院百五十年史』(2013年11月1日発行)には、当時の状況を「一九七六年以降キャンパスはようやく落ち着きを取り戻し、学園ファンションなどにも関心がもたれるようになっていった(388頁)」と記されている。

※「第二部学生新聞」については不明な点が多くあります。今後の歴史に遺すためにも、広報紙等関連資料をお持ちの方は、明治学院歴史資料館までご連絡ください。



「明治学院大学第二部学生新聞 第7号」1955年2月24日発行 第一面【部分】

明治学院歴史資料館 2023年度主な活動

展示

「生誕 170 年・『井深梶之助日記』刊行記念展示 井深梶之助 つながる、ひろがる」

2024年1月15日（月）～6月21日（金）

J.C.ヘボンのあとを引き継ぎ、第二代総理（学院長）として、30年にわたり明治学院を牽引した井深梶之助。

井深の日記と当館所蔵資料との「つながる」「ひろがる」を紹介しながら、井深梶之助の人物像に迫る展示です。

◆第一期…1/15（月）～3/15（金） ◆第二期…3/21（木）～6/21（金）※会期毎に展示資料が一部変更になります。

講演会・教育支援等

6月27日（火）三河内彰子先生「視聴覚教育メディア論 A」歴史的建造物3棟・展示室の見学

10月24日（火）石井久雄先生「教職専門演習」

10月25日（水）金圓景先生「ソーシャルワーク実習指導 A」

11月1日（水）～3日（金・祝）三河内彰子先生「視聴覚教育メディア論 A」学生によるパネル展示

11月4日（土）橋本優子氏「概念としての石」から読み解く：明治学院を中心とする日本近代の教会・学校建築（講演会）

11月25日（土）清泉女子大学ラファエラ・マリアセンター 歴史的建造物3棟・展示室の見学

12月7日（木）辻直人先生「明治学院研究2」歴史的建造物3棟・展示室の見学

1月23日（火）崇義女子高校 歴史的建造物3棟・展示室の見学

資料の受贈

菅沼彰宏氏 Examples of English Sentence 岡田実 編

張ヶ谷弘司氏 新約聖書改訳（賀川豊彦聖句揮毫）

相原昌行氏 松本亨関係資料 186点他

山田幸信氏 基督の一瞥 他1点

鍋島貞雄氏 遊子 7号～10号

佐藤八州夫氏 明治学院大学卒業記念品 オルゴール

小川善繼氏 白金祭史 1977～1999

竹田敏夫氏 アナウンス研究会関係資料 8点

山本留吉氏 佐々木邦著『諧謔小説 新夫婦日記』

購入資料

短冊2点

明治学院歴史資料館刊行物のお知らせ

『明治学院歴史資料館資料集』第20集「筆のあと、さまざま」

2024年3月刊行

本書は、明治学院歴史資料館所蔵資料から、明治学院にゆかりのある人々の墨蹟資料を集め、それらの図版に翻刻および解説を付したもので、ヘボン夫妻の直筆を含む『千里如晤』、島崎藤村・和田英作など明治学院同窓生18人の似顔絵が描かれた『白頭帖』からなる「書画帖」編と、井深梶之助・馬場孤蝶・賀川豊彦などの墨蹟資料からなる「個人の作品」編で構成されています。本学にて年間主題聖句の揮毫を担当されている徳田龍二先生に本書表紙の題字を揮毫していただきました。ぜひ手にとってご覧ください。

2023年度 明治学院歴史資料館委員

委員長 戸谷浩 明治学院歴史資料館長（国際学部）
委員 助川哲也 図書館長（国際学部）
佐藤努 大学教員（文学部）
西原博之 大学教員（経済学部）
植木寛 大学教員（教養教育センター）
櫛田健一 法人職員（法人事務局長）
鈴木直子 大学職員（図書館次長）
岡村淑美 高等学校教職員（高等学校教諭）
青野由美 中学校・東村山高等学校教職員
(東村山高等学校教諭)

歴史資料館

協力研究員 木村一 小暮修也 辻直人
特任研究員 細井守 松本智子
学芸員 亀元円
事務局 小杉義信 三上耕一

明治学院歴史資料館 News Letter No.15
発行者 明治学院歴史資料館
発行日 2024年3月31日
〒108-8636 東京都港区白金台1-2-37
電話：03-5421-5170
E-mail : shiryokan@mguad.meijigakuin.ac.jp
WEB : <https://shiryokan.meijigakuin.jp>